

## 社会学は「役立つ」学問か : 関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(2)

著者	中野 康人
雑誌名	社会学部紀要
号	110
ページ	23-32
発行年	2010-10-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/6435">http://hdl.handle.net/10236/6435</a>

# 社会学は「役立つ」学問か\*

— 関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（2） —

中 野 康 人\*\*

## 1 本稿の目的

社会学はそれを学んだ学生にとって「役立つ」学問なのだろうか。社会学部の卒業生が社会学をどのように役立つと評価しているのか。その評価の内容および属性との関連を調査データから実証的に明らかにすることが、本稿の目的である。

学問がそれを学ぶものにとって役立つべきものであるかどうかの議論は留保するが、大学での学びが社会に役立つようにという要請は、現在の日本社会に一定程度存在するように思われる。日本社会学会の機関誌『社会学評論』では、2008年に社会学教育に関する特集が生まれ、大学における学びとしての社会学についての議論が展開された。その中で奥村（2008）は、現役の大学生を対象にした調査データから、社会学を学んでいる学生が社会学のどのような側面を役立つものと捉えているかを明らかにしている。そこでは、(1)多角的な視点・幅広い見方、(2)進路・専門性・スキル、(3)社会の知識・理解・興味、(4)批判性・客観性・主体性、(5)ものの見方・考え方、(6)生活・生きていく上で、(7)人との関係・コミュニケーション、(8)教養としての知識、などといった項目が具体的な内容として抽出されている。なかでも、ものの見方の類が回答の4割弱を占め、専門性に言及したのは3割弱であった。社会学そのものの専門的な内容が直接役立つというのではなく、より広義な役立つ方を認めている回答者が多い、というのが奥村の知見の一つである。この学生による評価をもって、奥村は社会学教育の成否を考察している。しかしこの調査は、社会学を学んでいる途中の学生による評価である。そこには、社会学

に身近に接しているものの評価という利点がある一方で、学校教育の外に出た経験の少ないものの評価という欠点もある。

以下本稿では、学生ではなく既に社会学士となって大学の外に出ている卒業生を対象にした調査から、卒業後に社会学が役立つことの評価を紹介していく。社会学を学んだ卒業生に社会学の評価をしてもらうということは、学生による「予想される役立つ」ではなく、実際に「経験した役立つ」の評価を把握できるということの意味する。学生が抱くような役立つ方への期待は、そのまま社会に出ても保持されているだろうか。社会に巣立った卒業生は、社会学の専門性が役立つような経験をつんでいるだろうか。

## 2 分析の対象と方法

分析の対象となるのは、関西学院大学社会学部卒業生調査のデータである。関西学院大学社会学部では、2009年9月から2010年1月にかけて社会学部卒業生約24000名のうち、7551名を単純無作為抽出法により選び、自記式の郵送法により、調査をおこなった。調査主体は、関西学院大学社会学部50周年記念事業委員会である。回収数は2168票、回収率28.7%であった。

この調査では、社会学部卒業生に、その学生時代の勉強や生活のことをたずねるとともに、卒業後のライフコースや学生時代に学んだものとの関係も質問している。本稿の主要な分析対象となるのは、以下のような質問である。

『大学卒業後、関西学院大学で学んだ「社会学」が、現在までの生活の中で「役に立つ」

\*キーワード：役立つ、卒業生調査、社会学

\*\*関西学院大学社会学部教授

ことはあったでしょうか。できるだけ具体的にあなたの経験をお書き下さい。』

回答者は自由記述方式でこの問いに答えている。2168票のうち、1380票に何らかの記述があった。

記述されたテキストを、計量的に解析し、さらに他の質問項目との関係を分析していく。関連を見る項目は、基本的な属性（回答者の性別、回答者の卒業年）、職業経験（回答者の初職、仕事への満足度<sup>1)</sup>）、学生時代の勉学経験（学生時代の成績<sup>2)</sup>、入試時の志望<sup>3)</sup>）である。

卒業年との関係を見ることによって、役立つことの経年変化がわかる。勉学経験との関係は、大学での学びの程度がその後の「役立ち」にどのような影響を与えるかを明らかにする。職業経験との関係は、異なる社会的場面における「役立ち」を浮かび上がらせる。

### 3 結果

#### 3.1 「役に立つ」の概要

「役に立つ」ことの自由記述をテキスト分析した結果、表1のような単語が頻出単語として抽出された。テキストは、形態素解析ソフトMeCab<sup>4)</sup>を利用して単語に分割した。さらに、単語の共起関係を分析したところ、図1のようなネットワーク図が抽出できた。この図は、出現頻度10回以上の二単語のつながり (bigram) を図示したものである。

一般的な頻出単語（助詞など）、質問文中にあった単語（社会、学、など）を除けば、まず最

初に目につくのが「仕事」である。これは、社会学が役立つ生活の場面として仕事上でのことを述べている回答者が多いことを意味する。そして、「心理」や「福祉」といった大学で学んだ専門的な内容、「考え方」や「視点」といった非専門的な内容も多くあげられている。

頻度的には一割を超える回答で記述されている「仕事」は、どのような内容で語られているのだろうか。自由記述テキストの共起分析をおこない、「仕事」が含まれる回答に特徴的な言葉を抽出した<sup>5)</sup>。

表2の通り、保険、人事、広報など、仕事の内容に関わる単語が有意な共起語になっている。また、主人という語もある。以下、具体的な回答の例をいくつか紹介する。

広告会社勤務という立場から社会を幅広い視点でとらえたり、対象となる層をカテゴリズして戦略を立てるなど仕事上では役に立つことが多い。社会心理学や統計学などをもっと深く勉強できれば一層役に立っていると思う点が後悔される。

ちょうど今、1年前から広報部に所属しており、そこではマスコミの方とやりとりをさせて頂いています。その中で、メディア論や、マスコミ論などを学生時に学んだことは、非常に役立っていると実感しています。また、コミュニケーション論など、人と関わる全ての仕事において、無意識に自分の中に基礎として残っていると考えています。

- 
- 1) 質問内容は以下の通り。現在のお仕事についてお伺いします。全体として、あなたは現在のお仕事に満足していますか。
    1. とても満足している
    2. やや満足している
    3. どちらともいえない
    4. あまり満足していない
    5. まったく満足していない
  - 2) 質問内容は以下の通り。あなたの学生生活における勉学面についてお尋ねします。総単位数に占める「優（80点以上、「秀」も含む）」の割合はどれくらいでしたか。
    1. ほとんど優だった
    2. 優が多かった
    3. 優が半分くらい
    4. 優は少なかった
    5. ほとんど優はなかった
  - 3) 質問内容は以下の通り。関学の社会学部は、第一志望の大学でしたか。
    1. 関学の社会学部が第一志望だった
    2. 関学の社会学部以外の学部が第一志望だった
    3. 関学以外の私立大学が第一志望だった
    4. 国公立大学が第一志望だった
  - 4) MeCabについては、<http://mecab.sourceforge.net/>を参照。辞書は、IPA辞書を使用した。
  - 5) 前後5語以内に記述されている単語で、共起の指標T値が有意であるもの。

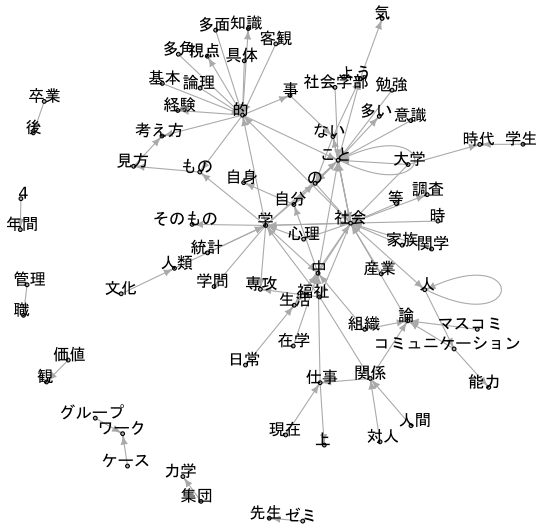


図1 「役に立つ」ことに関する自由記述

学生当時そんなに興味はなかったが、社会人になって、社会構造の理解と会社生活、特に人事、労務、経営の場面で本当に社会学部の勉強をしてよかったなと思ったことは何度もありますし、今でも思っています。特に人を扱う、団体（含会社）を運営する場合の心理学、特にグループダイナミクス等は重要なツールとなりました。

仕事上、物事を幅広い視点からとらえてかつ考え、実践することの基礎として役立っている。

主人の仕事が「社会保険労務士」であり、社会全体を見通していかないとやっていけない事業であり、夫婦で力を合わせて切り開いてきた。そのためにも、大学時代に「社会学」を学んだことは非常に役立った。

具体的な仕事内容が述べられると、科目名や分野名をあげて役立つ内容が回答されることが多いようである。逆に、仕事内容が特定されていない場合は、考え方や見方に関する回答が目立つ。

次に、「考え方」という語についても、同様に

表1 頻出単語

社会	こと	学	的
994	882	726	435
仕事	の	よう	中
270	266	239	236
人	時	事	関係
223	212	195	187
自分	心理	大学	ゼミ
179	177	165	163
生活	もの	福祉	人間
160	151	150	140
今	等	論	上
137	134	134	125
私	勉強	時代	考え方
121	121	113	111
現在	知識	方	具体
94	92	92	90
学生	コミュニケーション	学問	先生
89	87	85	83
会社	組織	経験	社会学部
81	79	78	76
物事	意識	集団	マスコミ
73	72	71	70
身	分析	企業	後
69	68	67	67
基礎	視点	理解	活動
66	66	65	64
年	ため	関学	それ
64	62	62	60
就職	何	力	見方
60	58	58	57
際	職場	問題	卒業
57	57	57	56
子供	者	興味	子育て
55	53	51	51
非常	様々	場面	授業
51	51	50	49

特徴的な単語を共起分析によって抽出した。表3の通り、見方、基本、基礎、判断などが有意な共起語となっている。具体的には次のような記述があった。

表2 「仕事」と有意に共起する単語

単語	T
上	6.10
現在	4.11
関係	2.59
従事	2.47
活かす	2.42
柄	2.14
保険	2.05
行う	1.94
人事	1.90
労務	1.90
主人	1.88
広報	1.87
直接	1.84
全て	1.79
中	1.75

表3 「考え方」と有意に共起する単語

単語	T
見方	3.76
的	3.26
物	3.00
基本	2.67
物事	2.18
捉える	2.14
基礎	1.99
判断	1.75
基準	1.65
理論	1.65

在学中、社会学は社会の役に立つのだろうか、と悩んだ時期がありました。社会人になってからは、仕事の中で分析手法として相関係数の使い方や、認知的不協和の原則、ラベリング論などが役に立ちました。しかし、具体的な手法というよりも、社会科学としての社会学を学んだことで、既存の制度を相対化して見ることや価値自由という判断基準など考え方を形づくるうえでの基礎となるものに役立っていると感じます。

物事を冷静・客観・整理して考えられる。その前提に社会学。特に、言語によって国や地方の文化、考え方が違うという事を知っていれば、「自分の言葉」を伝えようとするのではなく、「自分の考え・イメージ」を伝える事が重要だという事に気づく。営業の場面で、言葉のテクニックだけでは相手に響かない。大事なのは価値観やイメージを伝える事。そうすれば、相手にも必ず響き、物も笑顔で買ってくれる。

国内外への政策に関して協議したり検討したりする際に、環境社会学（〇〇教授）の授業で学んだことは参考にできた。また、社会倫理学で知った考え方も自殺率や犯罪率の統計などを読み解く上で役立っている。

幼き頃より社会はひとつではない、社会の価値はひとつではない、ということを強く意識しながら育ちましたので、関学における社会学の勉強はこの思いを系統的に整理して、科学的に分析するための大きな助けになりました。日本国内においても文化が違うあらゆる場所（京都、神戸、広島、福井、東京）で生活し、また米国においても西部、中西部、東部、南部と、これまた文化が違うあらゆる場所で暮らしました。世界はもちろんこれ以上に広く多様ですが、少なくとも自分がこれまで見聞きしたこと、生活した場所、関わった人達とのやりとりにおいて、社会学的なものの方、考え方が、大きく役立ったと思っています。

学問として具体的に役立った記憶はないが、（実際、就職して社会生活の中で身に付けるものが多いと感じる）多様な物事の考え方、視点や人格形成のベースとなるものは「社会学」から学んだことが大きく影響していると思う。

特定の科目名に関連づけての記述もあるが、やはりより一般的な形での役立ちが述べられている。

これらの単語の中から、表4の二つの側面に注目して分析をすすめる。一つは、役立つ場面としての「仕事」に関する記述である。類似の単語として、会社、組織、職場、企業を取り上げる。仕事系の単語は全体の19.1%で記述されている。もう一つは、役立つ内容としての「考え方」に関する記述に注目する。社会学的な考え方や視点といった単語が含まれる。見方、客観も加えると、

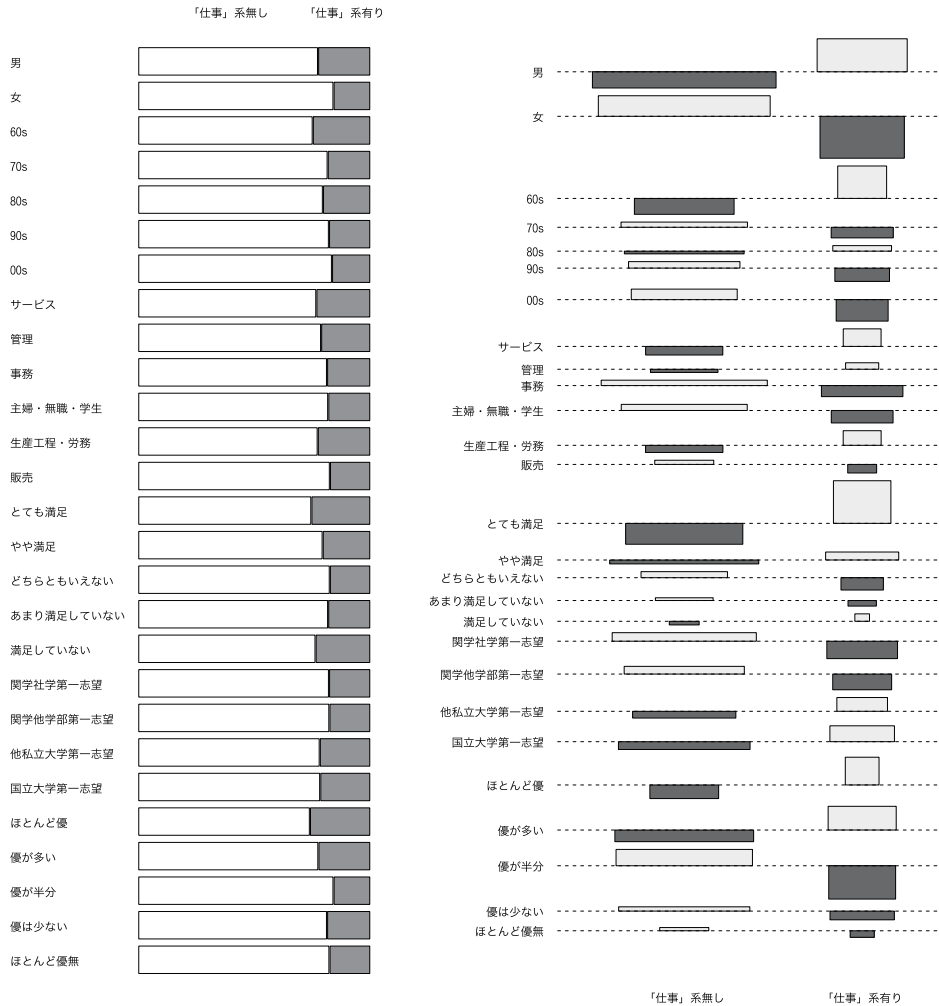


図2 回答者属性と記述の有無の関係（「仕事」系）

表4 注目する単語群

単語群	単語	回答数
「仕事」系	—	410
	仕事	270
	会社	81
	組織	79
	企業	67
	職場	57
「考え方」系	—	212
	考え方	111
	視点	66
	見方	57
	客観	37

考え方系の単語は全体の9.9%で記述がある。

では、どのような人、どのような経験が、こうした内容をかかせるのであろうか。以下では、各回答がどのような回答者によって記述されたものなのか、分析をしていく。

### 3.2 仕事関連の記述

図2は、「仕事」系の単語が回答中に含まれるか否かと回答者の諸属性などとの単相関レベルの関係をグラフ化したものである。左側の帯グラフは、各属性カテゴリの中で、「仕事」系を含む・含まないの比率を表している。右側のグラフは、各カテゴリにおいて「仕事」系を含む回答の期待値からどれほど観測値がずれているのかを示した

表5 「仕事」系記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model1	model2	model3	model4	model5
切片	14.74 .	-1.99 ***	-1.61 ***	-2.48 ***	14.85
卒業年	-0.01 .				-0.01
性別 (女性 d)	-0.38 **				-0.25 .
初職 (管理 d)			-0.13	-0.08	-0.04
初職 (事務 d)			-0.34 .	-0.35	-0.34
初職 (主婦・無職・学生 d)			-0.36	-0.35	-0.31
初職 (生産工程・労務 d)			-0.14	-0.15	-0.16
初職 (販売 d)			-0.75 *	-0.73 *	-0.79 *
仕事への満足度			0.15 *	0.16 *	0.13 .
志望 (関学他学部第一志望 d)		0.01		0.10	0.04
志望 (他私立大学第一志望 d)		0.27 .		0.24	0.17
志望 (国立大学第一志望 d)		0.23		0.28 .	0.24
学生時代成績		0.14 *		0.22 ***	0.26 ***
AIC	2060.2	2023.6	1637.2	1585.8	1567.0

. : p<0.10, \* : p<0.05, \*\* : p<0.01, \*\*\* : p<0.001

association graph である<sup>6)</sup>。

性別については、男性の方が女性よりも仕事系に言及する傾向が強い。卒業年との関係では、60年代卒業生が近年の卒業生に比べて仕事系に言及する傾向が強い。初職との関係は、サービス、管理、生産工程・労務で比較的言及が多いが、有意な関係ではない。現在の仕事への満足度については、仕事に満足している人ほど仕事系に言及する傾向がある。入学時の志望については、他大学を志望していた卒業生の方が、関学を志望していた卒業生よりも仕事系に言及する傾向がみとれるが、統計的には有意ではない。学生時代の成績については、優の数が多かったという人ほど仕事系に言及している。

これらの変数を用いて、仕事系の記述の有無に関するロジスティック回帰分析を行った結果が表5である。性別と卒業年のみでは、どちらも有意な関係が存在するが、職業関連の変数、成績や志望に関する変数を投入すると、有意な変数には、性別、初職、仕事への満足度、学生時代の成績が残る。単相関レベルでは有意な関係がみられた卒業の効果はなくなり、反対に、有意でなかった初職の効果が浮かび上がってきている。他の属性の如何にかかわらず、女性よりは男性の方が、販売や事務よりはサービス業の人の方が、現在の仕事

への満足度が高い人の方が、また学生時代の成績がよかった人の方が、仕事の場合での役立ちを記述する傾向が高い。係数の大小を比較すると、サービス業に対する販売業の効果が一番大きい。

### 3.3 考え方関連の記述

図3は、「考え方」系の単語が回答中に含まれるか否かと回答者の諸属性などとの単相関レベルの関係をグラフ化したものである。

性別については、男女の差はない。卒業年については、若い卒業生ほど「考え方」系に言及する傾向がある。初職については、サービス、事務、販売が比較的多く言及しているが、有意な差ではない。現在の仕事への満足度については、満足度が高い卒業生の方が言及しているが、有意な関係ではない。入学時の志望による、「考え方」系への言及の差はない。学生時代の成績については、「ほとんど優だった」と「ほとんど優はなかった」という両極端の卒業生が「考え方」系に言及する傾向がある。

これらの変数を用いて、「考え方」系の記述の有無に関するロジスティック回帰分析を行った結果が表6である。単相関レベルの関係と同様に、卒業年と学生時代の成績のみが「考え方」系への言及に有意な関係があるという結果になった。つ

6) association graph については、Friendly (2000) を参照。

表6 「考え方」系記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model1	model2	model3	model4	model5
切片	-32.30 **	-2.90 ***	-2.06 ***	-2.91 ***	-39.15 **
卒業年	0.02 **				0.02 *
性別 (女性 d)	-0.07				-0.04
初職 (管理 d)			-0.07	-0.10	-0.15
初職 (事務 d)			0.05	0.12	0.07
初職 (主婦・無職・学生 d)			-0.29	-0.22	-0.27
初職 (生産工程・労務 d)			0.17	0.25	0.23
初職 (販売 d)			0.27	0.34	0.32
仕事への満足度			-0.02	-0.01	0.02
志望 (関学他学部第一志望 d)		-0.08		-0.07	0.04
志望 (他私立大学第一志望 d)		0.04		0.04	0.11
志望 (国立大学第一志望 d)		-0.05		-0.01	0.04
学生時代成績		0.22 **		0.24 **	0.23 *
AIC :	1369.5	11328.4	1072.9	1046.2	1036.8

. : p<0.10, \* : p<0.05, \*\* : p<0.01, \*\*\* : p<0.001

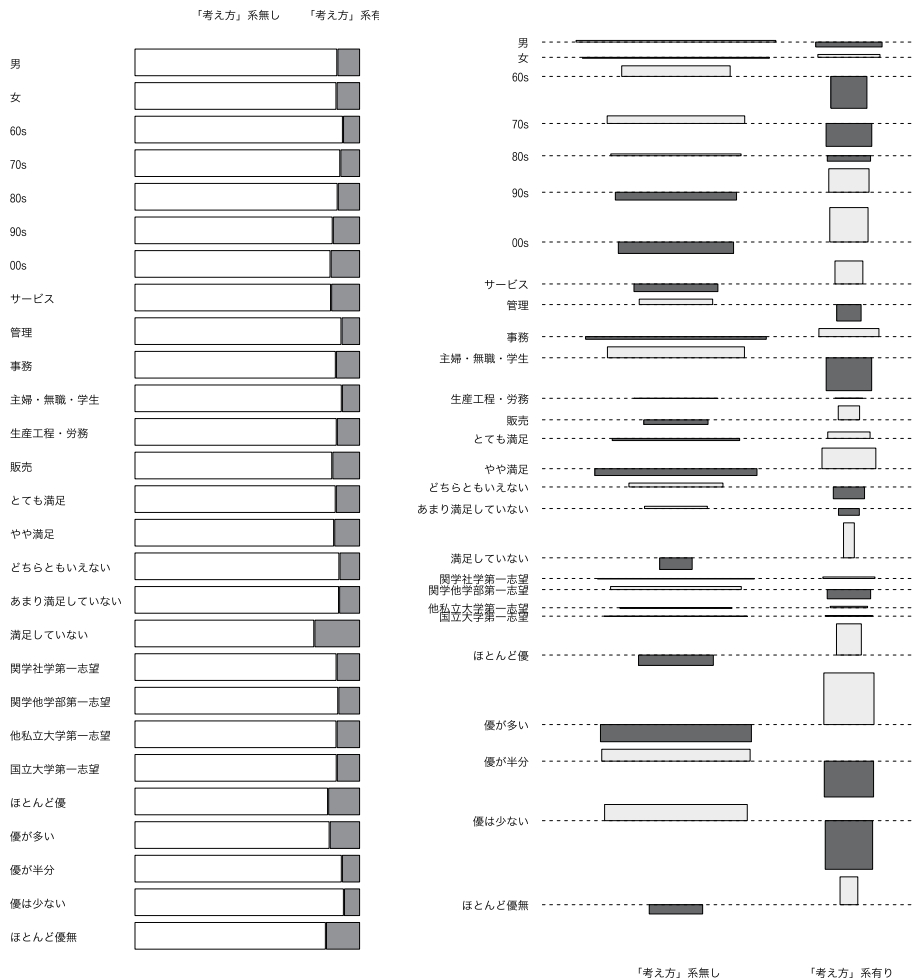


図3 回答者属性と記述の有無の関係 (「考え方」系)



まり、他の変数の如何にかかわらず、卒業年が後になるほど、そして成績がよいほど、「考え方」に言及するという関係である。係数の大小を比較すれば、卒業年が10年程異なるという変化と、成績が一段階異なるという変化が、ほぼ同じ効果をもっていることがわかる。

#### 4 結論

以上、社会学部卒業生調査のデータにもとづいて、社会学を学んで社会に出た社会学士が経験した社会学の「役に立つ」ことを概観し、回答者の属性との関係を分析してきた。

「現在までの生活の中で」という問いかけであったが、回答中の頻出単語の筆頭は「仕事」であり、会社や企業といった仕事にからむ単語をあわせた「仕事」系が含まれる回答は、全体の19.1%、なんらかの回答があった中では約30%を占める。そうした「仕事」系の記述に影響するのは、性別、仕事への満足度、初職、そして学生時代の成績であった。

どのような職業についているのか、満足いく仕事ができているのか、そうした職業にからんだ経験が、社会学の「役に立つ」という評価に影響を与えているのである。具体的な仕事の内容としては、広報、人事、などが共起分析の特徴語であった(表2)。特徴語ではないが、マスコミ、福祉、などでの記述が頻度的には多かった。学内の統計では、社会学部に特徴的な就職先というのはほとんどなく、他の人文社会学部と就職先という面で大差ない。しかし、こうして調査データを見ると、大学で学んだことが役立ちやすい職場というものがあることがわかる。今回の分析では、大まかな職業分類で初職の効果を測った。調査票では、より詳しい職業内容や職業移動の経緯を尋ねているので、社会学と職業のより詳しい分析が可能である。その点は、稿を改めて論じたい。

学生時代の成績については、優が多い人ほど「仕事」系の記述をする傾向が強い。もし、この結果が、きちんと社会学を学んだことによって仕事上「役に立つ」場面が増えた、ということの現

れならば、社会学教育の一端を担う者として、勇気づけられる結果である<sup>7)</sup>。

ちなみに、仕事系以外の役立ちの場には、次のようなものがあった。

結婚生活や子育ての中で、多少は役に立ったと思う。ゼミで学んだ結婚カウンセリング、発達心理学、精神医学などは夫婦関係をスムーズにし、子育てで“待ちの姿勢”が大切であることを教えてくれた。

在学中に受けたマスコミ論の授業が印象的で、メディアに対する見方がより慎重になった。ゼミでの勉強が非常に厳しかったので、それを乗り越えた自信がその後の人生において活きていると感じる。

文化人類学や文化社会学に特に興味があり、中でも授業中にきいた「この学問は社会で直接すぐに役に立たないかもしれないが世界には様々な価値観があることを学ぶのはとても大切だ」という言葉が印象に残っています。私の夫は〇〇〇〇人で夫の家族の文化を私も謙虚に学ぼうと思えたのは関学で学んだことが私の心の中に根付いているからだと思います。外国人と生活を共にするのはまさに日々異文化交流で、日本人の価値観だけが1番ではないのだ、その違いを尊重し、認め合っていく必要があるのだと思います。娘には日本と〇〇〇〇の祝日を両方教えています。

仕事に言及しない場合、社会生活一般での役立ちや家庭生活での役立ちの記述が目立った。

学部生を対象にした奥村(2008)の調査では、非専門的な側面を役に立つ項目とした回答が一番多いという結果であった。奥村は、この結果を社会学教育の成功・失敗の両側面で捉えている。成

7) 成績が良い人ほど詳しく自由記述を書いた、という可能性もある。

功の側面は、専門的でなくても何らかの役立ちやおもしろさを社会学が提供しているという点についての評価である。一方、失敗の側面は、学問の専門性が認められていないという点についての評価である。本稿で取り上げている、社会学部卒業生調査でも、「考え方」系の回答は多くあり、全体の9.9%、何らかの回答がある中では15.6%に「考え方」系の記述がある。この記述の有無に影響したのは、卒業年と学生時代の成績のみであった。

卒業年については、近年になるほど、「考え方」を記述する回答者が増えている。このことは、社会経験を多く積まない内は専門的な「役立ち」を見つけられない、とも解釈できる。しかし、学生の気質や水準の変化、教育側の内容や水準の変化、などもありうる解釈である。

成績の効果は、仕事系の記述に与えるよりもわずかに弱い効果になっている。また、表6の係数は直線的な効果を表している。仕事系と成績の場合は直線的な関係であったが、考え方系の場合は双極的な関係となっている。単相関レベルでは、「ほとんど優だった」という回答者と「ほとんど優がなかった」という回答者が、考え方系の記述をする傾向があるのである。仕事系の記述と、卒

業年と成績の三変数のみで関係を分析した場合、成績と記述の有無が有意に関係があるのは、60年代と70年代の卒業生のみで、80年代以降は成績と記述の有無は関係ない。60年代は成績のよい人ほど記述しているのに対して、70年代は、逆に成績がよい人の方が考え方系を記述しない傾向にある。専門性の役立ちについては、稿を改めて分析したい。

筆者は学部生の頃「社会学は大学を卒業してからそのよさがわかってくる」と社会学研究室的卒業生が話をしていたことを記憶している。社会学の分析対象が「社会」である以上、その「社会」での経験が増えるということは、それだけ社会学が切り込みうる事象を多く知ることとなり、あのと習ったことはこのことだったのか、と合点がいくことが多くなるのは理解できる。今回の分析結果は、その言を裏付ける形になった。

#### 参考文献

- Friendly, M., 2000, *Visualizing Categorical Data*, SAS publishing.
- 奥村隆, 2008, 「学生は社会学になにを見出しているか—社会学教育委員会調査から見る社会学教育の「岐路」—」, 『社会学評論』58(4): 415-436.

## How Useful Sociology would Be? Analysis on a Survey of Alumni of School of Sociology

### ABSTRACT

The purpose of this paper is to confirm how alumni of school of sociology evaluate what they have learned in their universityhood. Analysis on a survey of alumni of school of sociology reveals usefulnesses of sociology recognized by alumni. One of the most mentioned terms in their response is “work” related terms. “Sociological way of thinking” is also the one. Age, gender, occupational experiences, and marks in the university are examined whether they have any effects on alumni’s recognitions. We find that good marks promote to detect usefulness of sociology. Occupational experiences and satisfactions have effect on “work” related recognitions. “Sociological way of thinking” is getting more familiar year by year.

**Key Words:** Usefulness, Education, Sociology analysis